

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成 21 年 1 月 6 日

財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 工学研究科

職 名 教授

氏 名 大塚 浩二

事業区分	平成20年度・シンポジウム等開催助成		
事業内容	第33回高性能液相分離及び関連技術国際シンポジウム (HPLC2008 Kyoto)		
開催期間	平成20年12月2日 ~ 平成20年12月5日		
開催場所	京都大学(桂キャンパス)船井哲良記念講堂・桂ホール		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(講演要旨集)		
会計報告	事業に要した経費総額	(飲食・宴会経費を除いた額)	14,400,000円
	うち当財団からの助成額		1,500,000 円
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 参加登録費, 京都工芸繊維大学, 日本万国博覧会記念機構, 日本製薬団体連合会, 内藤記念財団, 展示広告費, 京都大学グローバルCOEプログラム	
	経費の内訳と助成金の用途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	招待講演者旅費補助	2,920,000	
	招待講演者滞在費	3,520,750	1,500,000
	若手研究者参加援助金	500,000	
	会場費	783,025	
	各種設備レンタル	617,000	
交通輸送費	792,000		
印刷費	2,585,000		
事務局経費	2,682,225		
合 計	14,400,000	1,500,000	

**The 33rd International Symposium on High Performance Liquid Phase Separations and Related Techniques (HPLC2008 Kyoto)**

高性能液体クロマトグラフィー (HPLC), キャピラリー電気泳動 (CE), マイクロチップ電気泳動 (MCE) 等の高性能液相分離法は, 特に医薬品開発, 疾病の早期診断等バイオ分野を中心に今後ますますその重要性が増すと考えられ, より一層の高性能化が強く求められている。今回第 33 回を迎えた本 HPLC シンポジウム (HPLC2008 Kyoto) は, これら液相分離法及びその関連技術に関する研究者が一堂に会して最先端の研究成果を発表し議論を行うことで, 同分野の進歩・発展を図ると共に, 研究者相互の親睦を深め広く国際協調体制を確立して, 分離科学のより一層の進展を目指すものである。これまで HPLC シンポジウムシリーズは, 1973 年の創設以来, 米国及びヨーロッパ各国で開催されてきたが, 近年, 特に我が国と中国とを中心とするアジア諸国における液相分離法の目ざましい技術革新を受けて, アジア地域における初めてのレギュラー会議(回数を付与する会議)としての HPLC シンポジウムを我が国において開催する運びとなり, その会場として京都大学(桂キャンパス)が選ばれた。去る 2001 年にはサテライト会議(回数を付与しない会議)としての HPLC シンポジウム (HPLC Kyoto) が京都工芸繊維大学において開催されているが, レギュラー会議が欧米以外で開催されたのは今回の HPLC2008 Kyoto が最初である。

本 HPLC2008 Kyoto シンポジウムには, 欧米諸国はもとより, アジア・オセアニア各国から著名な研究者 46 名 (欧州圏 16 名, 米国圏 13 名, アジア・オセアニア圏 17 名) を招待講演者として招き, あわせて国内からも 9 名の研究者に招待講演をお願いした。近年技術発展の著しい中国からは第一線で活躍する 12 名の研究者を招待した。招待者以外の一般参加者は約 300 名であったが, 中国からは 57 名の参加があり, 日本 (約 160 名) の次に多い参加者数となった。このことは, 中国の研究レベルの向上と経済発展を如実に証明する結果であり, 今後科学分野においても同国の果たす役割がますます重要になると予想される。このように今回の HPLC2008 Kyoto は, 日本及びアジア諸国の研究者にとって, 国際レベルでの研究発表と情報収集の絶好の機会を提供すると共に, それぞれの研究の一層の発展に大いに資することができたものと考えている。

HPLC2008 Kyoto では, 分離媒体 (超高性能カラム, ミクロ HPLC, CE, CEC, チップ分析システム, LC/MS 等), 複雑組成試料の超高性能分離, 超高速分離, HPLC 及び CE, MCE の医学, 薬学, 生化学的応用, proteomics, metabolomics の大項目を重点領域として設定し, プログラム編成を行った。最終的に, 口頭発表 92 件 (招待 55 件, 一般 37 件), ポ

スター発表 241 件の発表件数となり、当初予想を大きく上回る結果となった。特に口頭発表については、学会場での発表だけでは時間的制約から発表枠が少なすぎたため、イブニングセッションとして夜間にホテルの会議室（3 会場）において軽食を取りながらパラレルセッションを展開するという試みを行い、好評を博した。

また LC, CE, MCE ならびに関連領域の企業による機器及びカタログ展示会を併行して実施し、21 社の協賛を得た。特筆すべきは中国から 2 社の参加が得られたことであり、研究だけではなく製品開発においても今や国際レベルにまで達していることを改めて認識させられた。

本シンポジウムの成果は、一次的には参加者各々の今後の研究の活性化・さらなる進展に資するものと考えられ、また参加メーカーにおいては今後の製品開発の情報源、ユーザーのニーズの把握等に活用されるものと考えられる。さらに、それらにとどまらず、研究発表内容は、審査を経てプロシーディングとして学術雑誌 (Journal of Chromatography A) に掲載される予定であり、それを通して広く一般に周知され得るものである。このことは、本シンポジウムの二次的な成果として、液相分離法の今後のさらなる発展に対して有形無形の貢献をなすものであることを示していると言える。このプロシーディングは、定期刊行雑誌として冊子体およびインターネット上での電子書籍として全世界の研究者の目にも同時に触れるものであり、その波及効果は計り知れない。

このように、HPLC2008 Kyoto は諸外国からの多数の研究発表と参加者とを得て成功裏に終了することができた。京都大学教育研究振興財団のシンポジウム等開催助成金により本シンポジウムの財政が大きく支えられたことは言うまでもなく、ここに厚くお礼申し上げる次第である。